つた此の教派が、帝王も神の生む所、神の顯現する所、君父に事ふるは神に事ふると同一種事であるとまで説くに至つたのは非常な變化を生じたものと見るべきで、かゝる變化は其の東傳中に經過した諸地方に於てよりも、支那に於て著しく生ずべき可能性があり、從つて此の經は唐に於て西方の景士によりて選述されたものと見るのが妥當であらうと思はれる。

かく考へて見ると、當時支那に來た西方の景士等が其の教を宣傳する爲には、鋭利なる觀察と、周到なる用意を爲したものであつたことを好く推察することが出來、此の點に於ても此の殘經は史上に重要な價値を有するものと見ることが出來る。凡そ何れの宗教たるを問はず、新たに外國より來つて宣傳される場合には、かゝる事情は多少ともに認めらるべき所で、佛教の場合に於てもまた類似の現象を認め得るのであるが、景教については從來積極的にそれを説明する史料が存しなかつた丈けに、何やら事新しく感ぜられる次第である。これに關連して直に思ひ出されるのは、かの明末時代に天主教が傳へられた時に、その教師等が布教の爲に敢て執るを辭せなかつた方針であつて、殊に其の先鋒であり、そうして最も能く消息を知られて居るマテオ・リッチ[13]の執つた態度の如きは、やがて當時の景士のそれであつたらうかとも考へられる。兎も角も當時の景教宣傳については、單に景教碑の文句によつて吾々が想像し得るよりは、遙に多くの苦心を伴ふたものであることを證示するものである。

## 七　二三の章句についての聖書との對照

此の殘卷を研究するについては、曲りなりにも一々本文を解釋して、論據の出典なども精細に攷究すべきである